

翻訳教育のススメ

柴田耕太郎*

翻訳で食べるようになってから25年。最初は自分でやり、次に人のものを直し、今は人に教えることが多くなっている。

プロでもなかなか満足いく訳文は得られない。ブランド大学を出て、社会経験豊富な翻訳家志願者でも訳文以前の誤りが多い。語学職志望の大学生の英語力はお粗末なかぎりだ。英文を精確に読める人間がほとんどいないのは、中途半端な理解で良しとする旧来の英文読解教育にあるのではないだろうか。

小論では英文読解が必須のさまざまな社会の現場で、英文が正しく読み取られていない典型的な例をあげ、その理由とそれを乗り越えてゆくための方法論を探る。

I 実社会の現場

・論理が読めない外信部記者

あの痛ましい2001.09.11.テロ事件のすぐあと、ブッシュ大統領の演説を伝えた読売新聞の抄訳(2001.09.12夕刊)の次のくだりが気になった。

「今日、我々は邪悪をみたが、……」

邪悪は見ることができるものなのだろうか？ インターネットで原文を参照してみる。

……“today our nation saw evil, the very worst of human nature.”

ブッシュ大統領は、「悪」といってから、それでは漠然としすぎるのでカンマ以下を付け加えたと見える。

語法的に読み解けば、この場合 evil は広い意味では「悪」(総称用法で「悪なるもの」)だが、カンマ以下が同格でそれを説明し「人間の本性の最悪の部分」(very は強調、nature は不可算名詞で性質、the worst はその最悪の部分)といている。それで抽象的な evil が「倫理・道徳上のよこしま」と規定されることになる。もっと踏み込めば、ここは抽象名詞の具象化で「よこしまな行為・行動」、saw は「見る」(視覚に映る)が本義だが意味を狭めて「経験する」と解釈できる。すると「最低の人間性が示す卑劣な行為に遭遇した」との日本語が得られるはずだし、またそうしなければ新聞読者に原文と等価の日本語情報を提供したことにならない。

* 言語文化学科 非常勤講師

一流新聞社の外信部記者がこの程度の語法を心得ていないとは考えられず、英語での理解を適切な日本語に変換する論理思考力が欠けているのではないか。

・語感が鈍い経済学者

経済の理論のひとつに「合理的期待形成理論」（この理論で1995年、ロバート・エマーソン・ルーカスはノーベル経済学賞を受賞した）というのがある。素人にはとっつきにくい専門用語だが「こうなったらいいと思う（期待）ことを無駄なく上手に（合理的）実現（形成）させる」ことなのかな、とおぼろげに思っていた。あるときたまたまその方面に詳しい友人と話していて、原語は rational expectations だとわかった。「そうか、こうなるはずだという予測を理屈で組み立てる」ことなのだ、とは英語を見てはじめてわかったのである。これでは訳語の意味があるまい。いや「業界」内でだけわかればよいのだ、素人に対してそのほうが目くらましの効果もある、と経済専門家は考えているのかもしれない。だが、英語から日本語になったとたんに訳語が一人歩きする。いつのまにか「（理論からすれば）期待値がこれぐらいだから、せめてそこまで数字が挙がってほしい……」といった「実現を期待する」コメントが、経済学者自身の口から漏れるようにさえなってしまうのである。

expect がもともと「（よいことも悪いことも）見込む」の意味だと認識していれば、このような誤解を招く訳語は生まれなかったはずだ。

・日本語が弱い外交専門家

I The aim of the guidelines

The aim of these Guidelines is to create a solid basis for more effective and credible U.S.-Japan cooperation under normal circumstances, in case of an armed attack against Japan, and in situations in areas surrounding Japan.

—The Guidelines for U. S. -Japan Defense Cooperation

I 指針の目的

この指針の目的は、平素から並びに日本に対する武力攻撃及び周辺事態に際してより効果的かつ信頼性のある日米協力を行うための、堅固な基礎を構築することである。

上記は1997.09.24.に公表された「日米の新防衛協力指針」（新ガイドライン）の冒頭部分だが、日本語だけ読んで並列関係が正しく理解できるだろうか。

原文は under normal circumstances, in case of an armed attack against Japan, in situations in areas surrounding Japan の三つが 1, 2, and 3 の形での前置詞句の並列になっている。「平時でも、日本が攻撃された場合でも、日本周辺に問題がある場合でも」と素直に理解できる単純な並列だ。だが訳文では、「並びに」と「及び」の並列の格と、それらがつなぐものがわからない。原文通り読み解けたとしても、「平素から」と「周辺事態に際して」のコロケーション（ことば同士の結びつき）が悪く、「より効果的」に自然にはつながらない。

が、それにしても並列と言葉の用い方があいまいな悪文である。次のように直してはどうか*1。「この指針の目的は、平時において、また日本への武力攻撃の場合において、また日本周辺地域での諸事態において、より効果的かつより信頼できる日米協力のための堅固な基盤を構築することである。」

条約なら当然、外交のプロの手が入っているはずだが、この程度の日本語では、条文解釈に齟齬をきたすのではないか。

*1 元訳を生かし、直訳調にした。この credible は「確かな」の意味だがそのままにしておく。

II 大学受験の現場

英文和訳は大学受験時に必須であるが、入学後は英文科の学生でもなければ英文読解の訓練をすることはあまりないから、受験の英語を見ることで、実社会の英語の雛形がわかるだろう。

『英文解釈教室』*2（研究社出版、伊藤和夫・著）は、大学受験生対象にロングセラーをつづけている。「東大志望者が全員買うが、最後までだれもたどりつけない本」として有名だ。さもありなん、大学受験生程度の学力でこの本の内容についてゆけるとは思えない。とにかく難しいのだ。まず取り上げてある文章の多くは高級かつ抽象的な英文で、時として破格に慣れさせようとするのか悪文もある。かつ文法的解説が微に入り細にわたっており、逐一の理解にエネルギーを要する。それでも英語力の涵養になるから懸命についてゆこうという気にさせるのが、この本の実力である。読んで目から鱗がおちることもしばしば。

*2 1977.02.05.発行。1997.06.20.改訂版発行。2000.02.25.改訂版5刷発行。

例えば第5文型の説明にこうある。

「① OがCであると、Sが考える [知る]。

② OがCである状態を、Sが生じさせる。

という2つの意味が基本であり、……（第2章）」

早速原則を適当な英文に当てはめて、

I thought him honest. himが honest であると Iが thought する、のか

He shouted himself hoarse. himselfが hoarse である状態を Heが [shouted して] 生じさせるのだな、なるほどと納得した。

まただれもがよく悩む修飾関係についてはこういう。

「英語は語句の並行的な対応関係を重んずる言語であるから、この際は、

① まず (H+H) M という均衡のとれた形で考え、((論者注) H: 被修飾語 M: 修飾語)

② この解釈で通らぬ場合にかぎって H (H+M) の解釈 ((論者注) H+HM の意味だと思われる) をとるべきである (第14章)」

うん、plants and animals useful なら「有用な植物と動物」とまずとり、おかしければ「植物と有用な動物」とすればいいのか。なんでこんな簡単なことを学校で教えてくれなかったのか、と怒りと感動がないまぜになったのを覚えている。

とはいえ難しさの三つ目の要因は、この著書の欠点と言えるものであって、それは「訳が悪い」ことである。

伊藤は「大学入試以後に、一般教養として、翻訳の訓練が行なわれることはない。いきおい、学生は、大学入試の訳出法が唯一のものであり、その種の訳文が十分に通用する日本語だと思い込んでしまう。彼らが大学入試後にその方法で専門書を翻訳することが、大量の意味不明の翻訳書を我々の社会に横行させている。いや義務教育の段階から、『ひっくり返る』という形で不自然な日本語を学生に強要してきたことが、翻訳調の日本語を生み、日本語を破壊してきたのである。」(『予備校の英語』、研究社)と嘆き、本書でも例題の全訳のところどころに、訳出の工夫を述べているぐらいだから、読むに耐える訳文については、十分に認識していたものと思われる。だが、悲しいかなその伊藤の日本語訳が、ところどころ不満足なのだ。とくにまずいのは語感が鈍いこと。そのため多義語の語義の選択が甘く、日本語のコロケーションがおかしく、ニュアンスや力点がずれることがある。この三つが、ただでさえ難しい原文と日本語訳とのつき合わせを困難にしている。ここでは全15章のうち第1章を取り上げてその訳文を検討してみる*3。

*3 番号、下線部は問題箇所。評価基準は次に従う。

誤訳：明らかな解釈・語法の誤り。英文和訳の試験でも×になるもの

悪訳：原文と日本語で理解の差を生じさせるもの

誤差：正しくはないが英文和訳の誤差として許されるもの

修正訳：日本語訳で原文の意味が正しく伝わっているかどうかを問題にするため、伊藤訳を最小限訂正したものの

第1章

1.1.1

The freshness of a bright May morning in this pleasant suburb of Paris had its effect on the little traveler.

伊藤訳：この①楽しいパリ郊外の5月の明るい朝のさわやかさが、②小がらな旅人③に影響した。

①楽しい [悪訳]：遊園地か景勝地があってそこ(郊外)が「たのしい」場所みたいにとれてしまう。ここは enjoyable and making you feel happy の意味「気分をよくしてくれる」。

②小柄な [誤差]：「小柄」なら small とか short というだろう。little は「かわいい、若い、小さい」の意味を併せ持つ美称ととるのが妥当(以前アメリカ連続テレビドラマ

『Syougun』で国際スターになりかけた島田楊子が、国際女子マラソンの優勝者、ゴーマン美智子に扮した映画『リトル・チャンピオン』の little がこの感じ)。だが日本語ではこの三つの意味を併せ持つ単語が見当たらない（か弱い、という意味も加えれば「いたいけ」になろうが）ので、満足はゆかないが意味が偏らない訳語を選ぶ→「ちいさな」。

- ③影響した [悪訳]：例えば believe in him での him は「存在としての彼」「彼の内面」のうち、当然内面のほうで「彼のいうことを信じる」の意味だが、「彼を信じる」としてもよいのは「彼＝彼の内面」と自然に理解されるから。effect は「～に (on) 結果を引き起こす影響・効果」だが「さわやかさが、……影響した」では、身体（存在）に影響したものにとられてしまう。これはコロケーションの問題。ここでの effect は心（内面）に及ぼすに決まっているから、言葉を補って（「の気持ちに影響した」）訳文の読み手を正しい理解へ導いてやらねばならない。意識でも説明訳でもない、原文はそこまで書いてあるのだから。

freshness 「すがすがしさ」 bright 「(日光などが) 明るい」。its は主部全体を指す。

修正訳：この気分のよいパリ郊外の5月の明るい朝のさわやかさが、そのちいさな旅人の気持ちに影響を与えた。

1.1.4

The element radium, discovered by the Curies, is probably the most remarkable substance in the world.

伊藤訳：キュリー夫妻が発見したラジウムという元素は、①おそらく世界で最も注目すべき物質①であろう。

- ①「おそらく……であろう」[誤差]：probably は頻度でいえば「十中八九」。可能性はきわめて高い。

修正訳：キューリー夫妻が発見したラジウムという元素は、世界で最も注目すべき物質であろう（「おそらく」を除いた）。

1.1.5

The greatest American hobby today is photography. Every other person encountered at a vacation resort or seen strolling in a city park carries a camera.

伊藤訳：現在、アメリカ人の最大の趣味は写真である。①休日の行楽地で出会う人や町の公園②を散歩しているのが見られる人のうち、2人に1人はカメラを持っている。

- ①「休日の行楽地」[悪訳]：resort はラテン語由来で、「しげしげと通う」の意味から、(1) 盛り場 (2) 行楽地。ここは名詞ながら形容詞的にはたらく vacation がつき、グローバル英和辞典にも「休日の行楽地」とあるが、この訳語自体がおかしい。対する平

日の行楽地などといったものがあるようではないか。日本では行楽はおおよそ休日にするものときまっている(!?) のだから「リゾート地」「行楽地」でよいだろう。

- ②「散歩しているのが見られる人」[悪訳]： encountered と seen はともに受身形で person に掛かっている。日本語訳もきちんとした日本語で能動か受動かに統一するのがよい。「……で見かける散歩を楽しんでいる人」。photography は「写真撮影」
修正訳：現在、アメリカ人の最大の趣味は写真である。行楽地で出会う人や町の公園で見かける散歩を楽しんでいる人のうち、2人に1人はカメラを持っている。

1.1 例題 (1)

A sensitive and skilful handling of the language in everyday life, in writing letters, in conversing, making political speeches, drafting public notices, is the basis of an interest in literature. Literature is the result of the same skill and sensitivity dealing with a profounder insight into the life of man.

伊藤訳：①日常生活において、つまり②手紙を書いたり、会話や政治演説をしたり、公式の通知を起草したりするときに、気をつけてたくみに言葉を使うことが、文学への関心の基礎となる。文学は、③同様な技巧と感受性が人間の生活に対するもっと深い洞察を取り扱うところから生まれるのである。

- ①「日常生活において」[誤差]：卑近なことを連想させる「日常生活」の例に「政治演説」「公式の通知」が挙げられるのはおかしい。この everyday life は「実人生」「実社会」といった意味合い。
- ②「手紙を書いたり……起草したりするときに、」[誤差]：in が三つ並んでいるが、1番目は2、3番目に対し上位概念 (life のなかに、書いたり話したりがある) なので、「すなわち」とつづけるのはよいが、3番目の in のあと3つがひとかたまりで2番目の in と並列しているのに注意したい。つまり I, II, III (3-1, 3-2, 3-3) の形の並列。ここでのように並列の逐一が重要なものでない場合、原文と同じ並列の格をそろえるより読みやすさ優先にするのは翻訳では常道だが、英文和訳の練習としては文法優先の訳をつけるべきだろう。この②の箇所のようにザクッと訳す所と①、③のようにいわゆる直訳の箇所が何の基準もなく入り混じっているのが、この書に限らず英文読解本に見られる不満のひとつである。sensitive は「感覚が鋭い」こと。
- ③「同様な技巧と……生まれるのである」[悪訳]：原文を忠実になぞれば、(文学は)「そういう気の使い方とたくみさが人間生活をもっと深く見通す状態を按配する成果なのである」。

insight into ~「~を見抜く(こと)」insight は可算名詞化され具体的なものに転化「見抜く/こと・物・状態・力など」deal with ~「~を扱う」「~を処理する」→「按配する」「論ずる」「云々する」→「行う」(→は意味を狭める印)

だが、このままではどうも日本語としてわかりにくい。ここではじめて英文和訳での意訳の意義が認められるのだ。

修正訳：社会生活で、手紙を書くときでも、談話や政治演説や公式通知の起草をするときでも、気をつけてたくみに言葉を使うことが、文学への関心の基礎となる。文学は、こうした技巧と感受性を以って人間の生活をより深く洞察しようとするところから生まれるのである。

1.2.2

Most of us when we have seen houses which were picturesquely situated, and wore a look of unusual beauty and comfort have felt a desire to know who were the people that lived in them.

伊藤訳：①絵のように美しい所にあり、まれに見るほど②美しく楽しそうな様子をしている家を見て、そこに住むのがだれか知りたと思った経験を、たいていの人は持っている。

①「絵のように美しい所にあり」[誤訳]：situated は形容詞化した他動詞「(～に) 位置して」。例：Her town is situated at the foot of Mt. Fuji.

houses which were picturesquely situated をあえてわかりやすく一文にすると houses were situated in a picturesque way (家々は絵のように美しいあり方で位置していた)。つまりここは、「家のある場所が美しい」のではなく「家の佇まいが美しい」のである。

②「美しく楽しそうな」[悪訳]：beauty は前と同じ言葉がつづくのを避けるため「きれい」とする。まさか家自体が楽しんでいるわけではあるまい。comfort は beauty と並列する訳語を選ぶ「快適」→「心地よさ」。wear は「～を帯びている」。

修正訳：絵のように美しい佇まいをみせ、まれに見るほどきれいで心地よさそうな様子をしている家を見て、そこに住むのがだれか知りたと思った経験を、たいていの人は持っている。

1.2.3

Those who live nobly, even if in their day they live obscurely, need not fear that they have lived in vain.

伊藤訳：高潔な生活を送っている人々は、たとえ無名のまま人生を送っても、①人生が空しく終わることを恐れる必要はない。

①「人生が空しく終わることを恐れる」[悪訳] (誤訳に近い)：obscurely は「名もなく」。主文が現在形だから、真理に順ずる事実を示している。目的語となる節が現在完了形なので、「これまでそうしてきた」ことをあらわす。fear that ～は「～してしまうのではないかと (恐れつつ) 思う」。「人生の終わり方が空しい」ではなく、「空しいやり方で人生を送ってきた」と懸念するには及ばない、といっている。

修正訳：高潔な生活を送っている人々は、たとえ無名のまま人生を送っても、空しい人

生を送ってしまったのではないかと思う必要はない。

1.3 例題

In choosing an occupation, you determine many things that involve your happiness and satisfaction in life. The home you make, the community in which you will live, the standard of living that you will maintain, the recreations you pursue, and the environment in which your children will grow up will largely depend upon your choice of vocation.

伊藤訳：職業を選ぶ①ときには、生涯の幸福と満足②を含む多くのこと①が決定される。人の作る家庭、その住む地域社会、維持する生活水準、求める娯楽、子供の成長する環境は、大部分がどんな職業を選ぶかで決まってくる。

①「ときには、……決定される」[誤差]：in ~ing, 主文の場合、in 以下の副詞節が原因、主文が結果をあらわす場合が多い。ここも因果を訳にだしたほうがいいところ。

②「を含む」[悪訳]：訳文では「幸福と満足は、多くのことに含まれる」のか「幸福と満足など多くのこと」なのかがあいまい。実はこの「含む」は「必然的に伴う」の意味なのだから、それをくだいて「……に関係する」→「……にかかわる」ぐらいの訳をつけるのが、英文和訳であっても望ましいだろう。

修正訳：職業を選ぶことで、生涯の幸福と満足にかかわる多くのことを決めることになる。人の作る家庭、その住む地域社会、維持する生活水準、求める娯楽、子供の成長する環境は、大部分がどんな職業を選ぶかで決まってくる。

1.4 例題 (2)

Whether either the material or the intellectual changes in the past half century produced comparable changes in the American character is difficult to determine. The forces that create a national character are as obscure as those that create an individual character, but that both are formed early and change relatively little is almost certain.

伊藤訳：過去半世紀の①物質的または精神的変化のいずれかが、アメリカの国民性にそれと比較しうる変化を生み出したかどうかを決定することはむずかしい。国民性を作り上げる力は、個人の性格を作り上げる力と同じくらい②目立たぬものである。しかし、どちらの性格も早く形成され、比較的むずかししか変化しないことはほとんど③確実と言ってよい。

①「物質的または……どうかを決定する」[誤訳]：「いずれかが……生み出したかどうか」では、「どちらかが……生み出した」「どちらも……生み出していない」の答えを予想させてしまう。Whether と either ~ or がからみあってわかりにくいところだが、何ら説明はない。英文読解本には、本当に知りたいところが解説されていないことがよくあ

るが、ここも著者の伊藤がよくわからないので説明を端折ってしまったのかと勘ぐりたくなる。

代わって説明しよう。

まず Whether で始まる主節を it で置き換え読んでみるとわかりやすい。

It is difficult to determine whether either the material or the intellectual changes ~ either A or B : A か B かどちらかの選択 → まるごとで α と示す

whether : α or not が隠れている。つまり α であるのかないのかの選択

α であれば、A もしくは B (がある)

α でない (A もしくは B であるということではない) というのは、二つ考えられる

- ・ A でも B でもない
- ・ A でも B でもある

以上より次の四つの可能性が述べられているのがわかる。

- (1) 物質的变化が国民性の変化に影響を与えた
- (2) 精神的变化が国民性の変化に影響を与えた
- (3) どちらも国民性の変化に影響を与えていない
- (4) どちらも国民性の変化に影響を与えた

これが語法的な分析だが、文の流れから見れば「どちらも、少なくともどちらかは……与えた」感じであり、力点は、「与えたか」どうかよりも「決定するのがむずかしい」のほうだ。それで (このような解説をきちんとした上で) 修正訳のような訳文を提示するのがよいだろう。comparable は「……と比較に値する、……に匹敵する」ここは「the material changes または the intellectual changes に見合った」。

②「目立たぬ」[悪訳]：影がうすいわけではなく、わかりにくいのである。obscure は「不明瞭な、あいまいな」。

③「確実」[誤差]：「確実」と「確か」は使われる場面がちがう。これは国語の問題。日本語の使い方が甘くては、いくら英語の意味を云々しても説得性がない。

修正訳：過去半世紀の物質的变化または精神的变化のいずれにしる、その変化に応じてアメリカの国民性を変えたかどうかを決定することはむずかしい。国民性を作り上げる力は、個人の性格を作り上げる力と同じくらいわかりにくいものである。しかし、どちらの性格も早く形成され、比較的わずかしかな変化しないことはほとんど確かと言ってよい。

文例自体が難しく、かつ訳文に頭を悩ます題材なのがよくわかっただろう。だからこそ、訳語の選定には慎重の上に慎重を重ねてほしかったところ。

「This is the house in which he lives.

『これはその中に彼が住んでいるところの家です』に類するような悪文が、翻訳だけでなく評論文などにも見られることの最大の責任は英語教師にあるのではなからうか。」(『予備校の英語』)とまで言い切っている伊藤。この本は20年ぶりに大改訂している(死の直前まで校正していたのは感動的：1997.01.21.死去。1997.02.05.改訂版発行)のだから、時間がなかったとの言い訳はできまい。自分が「責任ある英語教師」の一人に含まれるのを、御本

人は気づいていたのだろうか。

III 出版翻訳の現場

翻訳が「商品」として扱われている現場の実態はどのようなだろう。ロングセラーの『キス・キス』（早川書房・刊、ロアルド・ダール・作、開高健・訳、初版は1974.09.30.発行。論者の手元の2001.07.15.発行のもので改訂第15版）をしてみる。

ロアルド・ダールの名前は、昔の007シリーズ『007は二度死ぬ』の脚本家として知っていた。日本が舞台になり、ボンド・ガールに浜美枝、若林映子、日本の情報機関の長に丹波哲郎、ボンド役はショーン・コネリーだった。原題は*You only live twice*. これはイギリスの格言、*You only live once*. (しよせん人生は一度だけ一だからがんばろう) のダールらしいもじりだ。英国海軍中佐のジェームズ・ボンドが香港で中国美女とよろしくやっている最中、何者かに暗殺され、海軍のしきたりにそって水葬される。ところがそれは敵をあざむくため、実は生きていてご存知の大活躍、という話だ。

このダールはおとぎ話の作家でもあり『おばけだぞー』はじめ、子供に親しまれている童話が多い。だが彼の真骨頂は、なんといっても短編小説。The absolute master of the twist-in-the-table. (Observer誌) という評もある。

そのダールだが、海外ほどは日本での人気は高くない。どうしてかと不思議だったのだが、『キス・キス』の日本語訳を読んでわかった。訳文が悪いのである。訳者は芥川賞の選考委員にもなった開高健。開高健の文学批評は辛らつを極めたと、諸処に書き記されているが、悲しいかな、翻訳については能天気であったようだ。誤訳・悪訳に満ち溢れている。

明らかな誤訳：誤法の無視／構文の取り違え／語義選択の誤り、と

悪訳：原文と和文で理解の誤差が生ずるもの／日本語として不適切な表現／用語等の間違い、に分けて、『キス・キス』内の各短編を調べてみた*4。

*4 IIで示した評価基準とは、翻訳と英文和訳の違いがあるため、異なっている。

どうしても許せない誤訳・悪訳箇所——この判断は中野好夫のことば*5に従う——だけで以下に記した通り。

*5 「この問題ではたしか中島健蔵が名言を吐いたことがあり、たしかそれは、『とにかく引用して恥をかかないだけの翻訳でありたい』というのであったように思う。すこぶる謙虚な、人間の限界を心得た名言だと思う」（『酸っぱい葡萄』みすず書房）。

	誤訳	悪訳
「女主人」	7	7
「ウィリアムとメアライ」	7	3
「天国への登り道」	3	4

「牧師のたのしみ」	6	21	
「ビクスビー夫人と大佐のコート」	11	15	
「ロイヤル・ジェリイ」	14	5	
「ジョージイ・ポーギイ」	21	7	
「誕生と破局」	4	2	
「暴君エドワード」	26	12	抜け1
「豚」	9	1	
「ほしぶどう作戦」	10	4	抜け2

誤訳 118、悪訳 81、抜け 3、という結果だ（この分析は別の機会に譲る）。

「引用して恥をかく」に「読んでいてまずいと思わせる」箇所を含めれば、上記の数字は軽くその3倍には膨らむだろう。以下、各短編より誤訳・悪訳箇所が混じり合っている部分を任意に取り上げ、検討してみる*6, 7。

*6 以下の誤訳・悪訳は「読んでまずい」と思う部分にも拡大してある。枚数の関係上、全11作品のうち7作品について示す。

*7 各編につき、原文、開高訳、論者のコメントの順。下線部は誤訳箇所、囲い部は悪訳箇所。

その1 THE LANDLADY より

Briskness, he had decided, was *the* one common characteristic of all successful businessmen.

てきぱきとした態度こそは、成功した実業家すべてに共通した、ひとつの性格なのだと心に決めていた。

[誤訳] 文法の無視：

「ひとつの」なら one でよいはず。the one (=only one) とあって、ご丁寧にも the に斜体がかかっている。修正訳：「あてはまる唯一の共通した性格」。

[悪訳] 日本語として不適切な表現：

確かに「心に決める」という表現はあるが、「もうあの人とは会わないと……」とか「絶対弁護士になってやるんだと……」といった、自分が決意し、自分の意志で実行可能なことについてというのが普通。ここは「こういうものだ」と思い込むわけだから、「……の性格」とはコロケーションが悪い。decide に引きずられ「決める」としたのだろうが、この decide は「判断を下す」という意味。修正訳：「決めてかかっていた」「の思いがつよくあった」など。

その2 WILLIAM AND MARY より

If this is about what I am beginning to suspect it is about, she told herself, then I don't want to read it.

これが、どんなことを書いているのかしらとわたしが疑うようなものなら、と彼女はひとりごちた。私は読みたくない。

[誤訳] 文法の無視：

what を the thing which に置き換え、二文に分解するとよくわかる。

This is about the thing. I am beginning to suspect that it is about the thing.

となる。it は抽象性が高く、代名詞 this をうける代・代名詞。

これはその事柄に関してのものだ。私はこれがその事柄に関してのものだとうすうす感じはじめている。

修正訳：「あのことだったらイヤだなと私が思っていることが書かれてあるのだったら」

[悪訳] 原文と和文で理解の誤差が生ずるもの：

tell oneself は「自分に言い聞かせる」。「ひとりごち」は、独り言をいう、の意（英語では talk to oneself）。修正訳：「心に言い聞かせた」

その3 MRS BIXBY AND THE COLONEL'S COAT より

This particular visit which had just ended had been more than usually agreeable, and she was in a cheerful mood. But then the Colonel's company always did that to her these days. The man had a way of making her feel that she was altogether a rather remarkable woman, a person of subtle and exotic talents, fascinating beyond measure;

いま終えてきた、こんどの逢引は、いつもよりたのしかったので、彼女はうきうきした気持ちだった。しかし、最近、大佐の仲間がいつも彼女をそんな気持ちにしてくれるのだ。その男は、彼女に、自分は人目を惹く女で、繊細な、異国風の魅力に恵まれた、はかり知れないほど魅惑的な女性だという気持ちにさせてくれる。

[誤訳] 語義選択の誤り：

この company は①交際 ②(集合的に)仲間、で不可算名詞。friend のように具体的な誰かを指すものではない。ここを勘違いしたため、存在しない「大佐の仲間」「その男」を登場させてしまった。

修正訳：(いま終えたばかりの大佐との逢引はとてもよかったので、彼女はウキウキしていた。)「とはいえこの頃大佐と一緒にいるといつもそんな気持ちになるのだ。大佐は……」

[悪訳] 原文と和文で理解の誤差が生ずるもの：

訳文では、「繊細」と「異国風の魅力」の関係があいまい(並列ならば不安定、かといっ

て繊細が異国風を修飾するとも読みがたい)。subtle, exotic ともに、訳文のような意味があるのも確かだが、ここは英語でよく使われる、and で結んだ同義語反復。捉えがたい、不思議な、というニュアンスを並べリズムを出しているだけ。無理に二語を訳し分けようとするから読者はかえってイメージがつかめなくなってしまう。似たような言葉を並べるか、思い切って一語にまとめてしまうとよい。

修正訳：「捉えがたい不思議な魅力の」または「不思議な魅力の」

その4 ROYAL JELLY より

Among the Bees in May

Honey Cookery

The Bee Farmer and the B. Pharm.

Experiences in the Control of Nosema

The Latest on Royal Jelly

This Week in the Apiary

The Healing Power of Propolis

Regurgitations

British Beekeepers Annual Dinner

Association News

『五月の蜜蜂たちの中で』

『蜂蜜料理法』

『養蜂家と養蜂』

『ノーゼマのコントロールに於ける諸体験』

『ローヤル・ジェリイ新説』

『今週の養蜂場』

『はちにかわの効用』

『修復論』

『英国養蜂家の記念晩餐会』

『会報』

[誤訳] 語義選択の誤り：

『修復論』は regurgitation を restoration と見誤ったか。『みつばちの反芻』とする。

[悪訳] 用語等の間違い：

the B. Pharm. の Pharm. は「養蜂」ではおおざっぱすぎる。ここは、語頭が大文字で固有名詞化し、ピリオドが略語を示しているから、pharmacy (薬学) とか pharmacology (薬理学) とか pharmacist (薬剤師) とか pharmaceutical (医薬) などどれかの略語であり、業界のことをいっていると推察される。要するに薬剤関連なのだと見当をつけて、当たらずとも遠からずのそれらしい見出しにしておくといよい。修正訳：「蜂蜜療法のページ」「養蜂家の薬学豆知識」など。

日本語として不適切な表現：

見出しとして統一性に欠ける（元のままでは何の雑誌かわからない、タイトルのバランスが悪い）ことは避けるべき。見出しも並列の一種なのだ。

『はちにかわの効用』は訳されたのが1974年だから仕方があるまいが、『プロポリスの癒しの魔力』ぐらいに、『英国養蜂家の記念晩餐会』それほどおおげさなものではなからう、『年次記念パーティー報告』に、『会報』は『事務局よりのお知らせ』か。以下『五月の蜜蜂とともに』『蜂蜜クッキング』『ノゼマ管理の実際』など。

その5 GEORGY PORGY より

It always ends at precisely the same place, no more and no less, and it always begins in the same peculiarly sudden way, with the screen in darkness, and my mother's voice somewhere above me, calling my name:

それはつねに正確に同じところで終り、多くなることも少なくなることもなく、また始まるときはいつも、闇のなかのスクリーンのように妙に唐突で、どこか私の頭上あたりから母の声が私の名前を呼んでいるのだ。

[誤訳] 文法の無視：

「正確に」では ends に掛かってしまう。precisely は強調的に、the same place に掛かる → 「まさに」

「闇のなかのスクリーン」では、なにも見えまい。

in は状態を示す前置詞、darkness は総称用法で暗闇（であること）。the screen in darkness は、暗闇状態にあるスクリーン → 「真っ暗なスクリーン」。闇のなかのスクリーン、なら闇は特定化されるので、the screen in the darkness

[悪訳] 日本語として不適切な表現：

主語と述語が不明。文のねじれがある。

「それ」が主語、「終り」が述語ととるのは順当だろう。では「多くなることも少なくなることもなく、」はどこに掛かるのか。「それ」（場面のこと）も「終り」も量でないからだめ。日本語を読むかぎりどこにも掛かる場所がないが……。原文を参照して (no more and no less)、以上でも以下でもなくまさしく同じ場所で、という意味なのだとわかる。

よしんばこれを許容するにしても、「また始まるときは」以下の主語を当然「それ」と思って読んでゆくと「母の声が」という主語になれそうな要素が出てくる。ならば「また始まるときは」以下から違う文が始まるのかと思い直して「母の声」を主語に読み直そうとすると「妙に唐突で」が以下のどこにも掛からない。つまり「妙に唐突で」までの主語は「それ」、以降の節の主語は「母の声」と一文のなかで主語が分裂してしまっているのだ。

これは少女雑誌の投稿ページなどによく見られる。「最初わたしが行きたいっていったんだけど、彼氏が行きたくないってかいて、いつまでもぐずぐずしてたらやっぱ行こうかっ

ていって行くことにしたんだ。」ぐずぐずしてた、のは投稿者でやっぱ行こうかといったのは彼氏のような。これを「彼氏が行きたくないとかいうんで、わたしはぐずぐずしてたら、彼がやっぱ行こうかっていってくれたんで、ふたりで行くことにしたんだ。」とすればりっぱな会話文になるが、フツーの少女のしゃべり言葉の勢いが失せてしまうので、この種の雑誌の編集者も手をいれる加減に苦慮しているようだ。

だが、本作品はちゃんとした大人の読み物なのである。記者はきちんとした日本語を書き、編集者は遺漏なく直しを入れて初めて、日本語訳として世に出せるのではなかろうか。この箇所、掛かり方の誤りと表現の拙さが入り混じっているから始末が悪い。

修正訳（全文）：「それはいつもぴったり同じところで終る。そして始まるときはいつもきまってる。唐突に、真っ暗なスクリーンがあらわれ、どこか上のほうから私を呼ぶ母の声が聞こえる。」

その6 PIG より

The news of this killing, for which the three policemen subsequently received citations, was eagerly conveyed to all the relatives of the deceased couple by newspaper reporters, and the next morning the closet of these relatives, as well as a couple of undertakers, three lawyers, and a priest, climbed into taxis and set out for the house with the broken window.

二人が殺されたというニュースは、三人の警官がつづいて感状をもらったことから、新聞記者たちの手によって、直ちに故人の親類すべてに伝わり、その翌朝、特に近親の者たちは、二、三の葬儀屋、三人の弁護士、それに一人の牧師ともども、タクシーに乗って、この窓の破れた家へ馳せつけた。

[誤訳] 語義選択の誤り：

無実の人を殺して感謝状をもらえるなら、ためしにやってみたいと思う人がでるかもしれない。この citation は「召喚状」ととるべき。誤認殺人で呼び出されたのである。

[悪訳] 日本語として不適切な表現：

「特に近親」。一読したとき、(ほかの人たちでなく)「とりわけ」の意味かと思ったが、読み進めないで再読し「きわめて近い」の意味で使っているのがわかった。このような読者に負担をかける読み方をさせるのは訳者として慎むべきだろう。「近親」で十分その意は含んでいる。冗漫を避けるためにも「特に」はとればよい。

「馳せつける」はあまり第三者に対しては使わないし、だれか偉い人のところか、大事なことのために行くようで大仰。

修正訳：「近い者たちが」/「向かった」「赴いた」

その7 THE CHAMPION OF THE WORLD より

He kept his head moving all the time, the eyes sweeping slowly from side to side, 166
(107)

searching for danger. I tried doing the same, but soon I began to see a keeper behind every tree, so I gave it up.

しじゅう頭を動かして、視線をゆっくり左右にくばりながら、油断を怠らなかった。私もおなじことをやってみたが、まもなく、どのかげにも番人のいることがわかってきて、途中で諦めてしまった。

[誤訳] 語義選択の誤り：

see はこの場合「さとり、理解する」ではなく「……が眼に入る」。いもしない番人が、怖いから何人もいるような気になるのである。修正訳：「どのかげにも番人がいるように見えて」

[悪訳] 日本語として不適切な表現：

「視線を向ける」「視線をそらす」というコロケーションはあるが、「視線をくばる」とはいわない。翻訳で許容される範囲ともいいたいが、それはほかに問題があまりない訳文であってのこと。かつて小田島雄志・訳のシェークスピア『マクベス』の「おれの心の琴線がその脚をつなぎとめてるでも、……」との表現に、福田恒存が、心の琴線はそれに触れるものであってそれで縛るものではない、と噛みついたことがあったが、小田島訳の文体だから許容できる、いや非文であると議論が分かれたのを思い出す。

こうなると日本語の問題になってくるが、長野と山梨の県境にある観光地「美しの森」の呼称にも福田は文句をいっている。剣が峰、袖ヶ浦は前後の名詞をケでむすんで「何の何」という形にしているからよいのであって、「美しの森」「美しが原」は前の形容詞を名詞扱いする無謀であると（福田ほか編『崩れゆく日本語』）。この種の破格は、少しなら許せるかもしれないし、場合によっては作者の文体・個性であると寛容になれるようが、怪しい表現が多いと読者のいらいらは募り、急にささいなミスをも許したくなくなるのである。

修正訳：「目をあちこちに向けながら」「視線の先に気を配り」など。

この本のあとがきに「なお、この翻訳にあたっては、読者にクリスマスと正月の夜を楽しんで頂くため小泉太郎氏と常盤新平氏が家庭の平和をやぶって大車輪の働らき（ママ）をされた。感謝して記しておく。」とあるから、後の直木賞作家生島治郎（本名：小泉太郎）と常盤新平が下訳をし、芥川賞作家たる開高健が直しを入れたものと思われるが、それにしてもちょっとおそまつではないか。翻訳だからといって許容されることばの基準を下げてもらっては困る。もっときちんとした日本語でロアルド・ダールを読みたいと思っているのは私だけではないだろう。

IV 大学研究の現場

せめて大学英文科ぐらいは、まともな英文読解教育をされていてほしいが……
まず次の訳文を読んでいただく。

わたくしの歴史観はそれ自体がすでに一片のささやかな①歴史であります。しかも②この一片の①歴史はもっぱら他の人々の①歴史であって、私一個人の①歴史ではありません。③というのは、だいたい一人の学者の畢竟の事業といえども、彼のくみ出したわずかに一桶の水量をそれに何百何千何万倍する同種の水量によって養われたとうとうたる知識の大河の流れに寄与するだけのはなしだからであります。いやしくもわたくし一個の歴史観が何らかの光明を投ずることができる④ためには、否、少なくとも何らかの可知的な意味をもち得る④ためにも、まずこの歴史観がいかにして⑤発生し、いかにして⑤⑥生長し、またいかなる社会的、個人的背景を⑤もつものであるかを示すごときかたちにおいて⑦それは提出されなくてはなりません。

(下線部は論者)

世界的歴史家、アーノルド・トインビーの『試練に立つ文明』(社会思潮社)の深瀬基寛(故人・京都大学名誉教授)による訳文。

なんとも持って回った読みづらい文章だが、こういうものを「学者らしく真面目な、原文に忠実な翻訳」という人がいるかもしれない。だがそうではない。わずかこれだけの文中に誤訳が2箇所(①、②)、冗漫で意味がとりにくいところが1箇所(③)、日本語のコロケーションが悪く読みづらいところが2箇所(④、⑤)、漢字の誤用が1箇所(⑥)、日本語では使わない代名詞の使い方をしているのが1箇所(⑦)ある。

(原文)

My view of history is itself a tiny piece of history; and this mainly other people's history and not my own; for a scholar's life-work is to add his bucketful of water to the great and growing river of knowledge fed by countless bucketfuls of the kind. If my individual view of history is to be made at all illuminating, or indeed intelligible, it must be presented in its origin, growth, and social and personal setting.

- ① [誤訳] この history は「歴史学」の意味。
- ② [誤訳] this は a piece of history ではなく、history (歴史学なるもの) を指す (V の解説参照)。
- ③ [冗漫で意味がとりにくい] まず修飾過剰。次に「……といえども」は否定につづくのかと思えば、「寄与する」という肯定的なことばにつながり、その「寄与」が「……だけのはなし」とおとしめられていて、結局ほめているのか、けなしているのかわからず、いらいらする。—「寄与するだけのはなしだからであります」では、(寄与するが肯定的な響きをもつものに対し、だけのはなしが否定的に響きかつあいまいで)「だからどうなんだ」と問いたくなる。
- ④ [コロケーションが悪い] 「否、少なくとも」と「……ためにも」の相性が悪い。考えられる組み合わせを挙げ、検討してみる。
(1)「……できるためには、また何らかの可知的な意味をもち得るためにも」
問題ない並列だが、原文と意味が異なる。

(2) 「……できるためには、否、何らかの可知的な意味をもち得るためには」

換言し、より正確に述べる。

(3) 「……できるためには、否、少なくとも何らかの可知的な意味をもち得るためには」

換言し、卑近な例を強調する。

(4) 「……できるためには、否、何らかの可知的な意味をもち得るためにも」

換言し、……部分の大上段ぶりを緩和する。

(5) 「……できるためには、否、少なくとも何らかの可知的な意味をもち得るためにも」

換言するが、卑近な例の強調と……部分の大上段ぶりの緩和が噛み合わない

人により語感がズレることもあろうが、おおむね (1) は不可、(2) は可、(3) は可、

(4) は場合により可、(5) は不可、といえるのではなからうか。

⑤ [コロケーションが悪い] 「発生し」「生長し」はよいが、三つ目の「持つものであるかを」は並列が不自然。

⑥ [漢字の誤用] 「生長」では植物のようだ。「成長」としたい。

⑦ [代名詞の不適切] 「それは」とは「歴史観」のことと原文とつけあわせれば分かるが、日本語での慣用に反する。このように一つの文中に名詞とそれを受ける代名詞がある場合、先行し副詞節的にはたらく中の名詞を受けた代名詞を主語にはできない（二つは違うものと思われてしまう）。

この文章には、抜粋ではあるが東大教授であった故・朱牟田夏雄の訳（『英文をいかに読むか』文建書房。昭和34年1月4日初版発行。平成10年2月20日、第64刷発行）もあるが、「英文の解釈あるいは英文和訳というのは、与えられた英文の意味を理解して、そして多くの場合、その理解した意味を日本語で言いあらわすことである」「この種の文章は、全体が何を言おうとしているのかをしっかりとつかんで、よく意味の通ずる訳文になるよう心がけてほしい。安易な逐語訳は感心しない」というわりに、本人自体の訳文は逐語訳になっている（朱牟田も history を取り違えている）。

〈朱牟田の訳〉

わたしの歴史観は、それ自身が一つの小さな歴史だといえる。その歴史も、主として他の人が作ってくれた歴史で、私自身の作った歴史ではない。というのは、学者の一生の仕事は、自分なりのバケツ一杯の水を、同類のバケツ一杯ずつを無数に集めた、大きなしかもますます大きくなる知識の川に、そそぎ加えることだからである。だから、私一個の歴史観を、かりにも人を導く、いやそこまででなくとも人にわかりやすいものに、しようと思えば、その起源、発達、社会的個人的背景等を明らかにして、お目につけねばならない。

高名な歴史家の有名な啓蒙書の冒頭部分なのだ。訳者も全力を尽くして訳文を練り上げたに違いないが、それにしてお粗末。語学教員は英語で考えるクセがついていて、日本語での思考がうまく働かないのだろうか。

V 翻訳教育の現場

以上見てきた例はいずれも世間で一流とみなされる人々の日本語訳文であり、たまたま目に付いたものを挙げたままで、重箱の隅をつついて揚げ足取りをするものではない。英語に堪能なはずのそれぞれの分野の専門家がこれだけ過ちを犯すのも、英文を正しく読む訓練が欠けているからではないのか。

誤訳・悪訳をいくら指摘しても減ることはない。そのような人はもともと正しく読む力が欠けているのだ。まず根本的に英文を正しく読むことからはじめなければなるまい。正しく読めさえすれば、次は本人の文体の問題なのであり、そこからは好き嫌いで論じればよいことだと思う。精緻に読むことでしか英文を読めるようにはならない。そして精緻に読むことは努力さえすれば誰でもできることなのである。そのあとは、それぞれが自分の文体で語ればよいことだ。翻訳の醍醐味はそこにある。翻訳者はよい意味での反逆者でもあるわけなのだから。

そこで論者がこの10年来、翻訳者養成の私塾で試みている英文精読の方法をご披露する。主に四年制大学卒の社会人、延べ500人に対し、以下のような、

精読：一点の曇りなく読み解く

直訳：原文の構造を生かし解釈は控える

訳文添削：提出者のレベルに合わせて指導する

モデル訳：商品として通用する翻訳の一例を示す

の順による英文読解講義を行ってきた。少なくとも30人以上が翻訳書を出し、うち3人は15冊以上を出している事実から、多少の効果はあったかと自分では思っている。

この方法論は英語習得に意欲ある大学生にも通用するのではないかと考え、ささやかながら学生相手に実験を始めたところだ。

・翻訳のプロセスを応用した英文講義イメージ

[精読]

1 <My> 2 <view of history> is 3 <itself> 4 <a tiny piece of history> 5 <; and> 6 <this> mainly 7 <other people's history> 8 <and> 9 <not my own> 10 <;> 11 <for> 12 <a scholar's life-work> is 13 <to add> 14 <his> bucketful of water to 15 <the great and growing river of knowledge> (fed by countless 16 <bucketfuls> of 17 <the kind>). 18 <If> 19 <my individual view of history> 20 <is to be made> 21 <at all> 22 <illuminating> 23 <, or indeed> 24 <intelligible>, / 25 <it> 26 <must be presented> 27 <in> 28 <its origin, growth, and social and personal setting.>

1 著者であるトインビー。「トインビー史学」「トインビー史観」と称せられる足跡を残している。

2 「歴史の見方」「歴史観」「史観」など、文体と文脈に訳語をあわせる。

3 my view of history を強調。

4 a piece of は後に不可算名詞が来て、一片の、一件の、一個の、一つの、などの訳語と

- なる。part (分割できないある部分) に比べ、個としての独立性が強い。ここの history は、歴史学を示す。「ささやかな一個の歴史学」
- 5 セミコロンは比較・対照・敷衍のしるしだが、ここでは10のセミコロンと合わせ大きな and の意味も持っている (文をはっきり切りたくない著者の気持)。敷衍「そして」。訳の流れにより「とはいうものの」ともなりうる。
- 6 文脈からして=history。あとに is が省略されている。
- 7 「他の人たちの歴史学」だが、当然、他の歴史家が意識されている。
- 8 (is) other people's history と (is) not my own (history) を並列。
- 9 not my own history と読む。
own は次の三つの意味を持つ。ここは (1)
(1) my own car (所有)
(2) my own way (独自性)
(3) be one's own doctor (自主性)「病は自分で治す」
- 10 比較・対照・敷衍のうち、次に for が来て敷衍。
- 11 理由を補足的に示す接続詞「というのは……だからだ」
- 12 a scholar は総称用法で、学者なるもの。life-work は、生涯を貫く仕事 (この場合はライフワークとしてもよいが、通常カタカナと英語綴りには誤差があるのを承知のこと)。
- 13 「加えること」A is to B (A は B することである) to 不定詞の名詞的用法。be to = 予定・可能・義務・命令・運命を示すとは限らぬことに注意。
- 14 a scholar
- 15 growing は自動詞の現在分詞形の形容詞 (……する) で「増大してゆく」。of は、同格 (……という)。「知識という増量してゆく大河」ここ g, g の音をそろえリズムを出している。
- 16 可算名詞「何杯ものバケツ」bucketful (バケツ一杯の量)
- 17 his bucketful of water を指す「その種のもの」the=such a
- 18 if 節、帰結節ともに動詞が現在形なので、仮定法でなく単なる仮定。
- 19 文頭の my view of history の言い換え。individual とある分だけ、ことさら自分が意識されている。「私個人の歴史観」
- 20 予定・義務・可能などを示す be to だが、if 節に用いられて意図・目的 (……しようと) をあらわす。例: This book needs to be read several times if it is to be fully understand. (理解するには読み返さねばならない)。主節が受身形になっているのは控えめな気持ち (主語をぼやかす) のあらわれ。ここのあたり、平叙文で簡略化すると I make my view of history illuminating. (自分の歴史観を光明を投じるものにする)
- 21 強調を示す。肯定文で「いやしくも」=to any extent
- 22 他動詞 illuminate (明るく照らす) の現在分詞形の形容詞 (他人を……させる/する)「他人を明るく照らす」→「啓蒙する」
- 23 , or は言い換えで、いや。indeed は前言を敷衍 (もっと言えば……) し、文脈により、実に/実際に (前節を強調)、実は/実際は (前節を否定)、いや/それどころか (前節を強調否定)、などの訳語が与えられるが、ここでは illuminate などと偉そうなことばを使

ったので、やわらかく言い換えている。「いや少なくとも」ぐらいの語感。

24 「(他の人が) 理解できる」

25 =my individual view of history

26 「示されねばならない」(「示されるに違いない」ととれるのは主として無意志動詞の場合。ここは present が有意志動詞であり、かつ「違いない」ととれる然るべき前提が示されていないので不可)

27 具象的には場所、抽象的には状態を示すのが in の本義。ここは状態だが、present ~ in で、~を一の形に描写するの意。

28 I, II, and III (1 and 2) の並列「自分の歴史観の発端・成長・社会的ならびに個人的背景」だが、そのまま日本語にすると並列がやや不自然。くだいて「自分の歴史観はどのように始まり、発達し、それを持つに至った社会的・個人的背景は何か」

[原文に即した訳]

私の歴史観はそれ自体が、歴史学のささやかな一個である。そしてこの歴史学というものは主として他の(歴史家の)人々の(つくってきた)歴史学であって私自身の歴史学ではない。というのは、学者の生涯を貫く仕事は自分のバケツ一杯の水を、そのような類の無数のバケツに入った水に養われた、知識という増量する大河に加えることであるからだ。私の個人的な歴史観がいやしくも人を啓蒙するようなもの、いや本当のところ人が理解できるものにされるには、私の歴史観はその始まり、成長、そして社会的・個人的背景というものの形で提示されねばならない。

[サンプル訳と訂正]

私の歴史観はそれ自身が小さな一片の①歴史である。しかもこの①歴史とは主として他の人達の①歴史であって私自身の①歴史なのではない。というのも学者のライフワークとは、長大にして成長しつづける知識の川に自分の水をつぎたす事であるが、この川には多数の学者によって大量の水が供給されているからである。若し②私自信の歴史観が③輝いたもの④或いは理解できるものとなり得るとすれば、それは⑤独創性、成長性及び社会的・個人的背景をもって提示されなければならない。

評) 概要は捉えている。語義に敏感になってほしい。

① 易しいことばの多義性に注意→歴史学

② 誤字→私自身

③ 他動詞の現在分詞形の形容詞は「人を……する/させる」→人を啓蒙する

④ or は言い換え。理解するのは、一般のひと→いやせめて理解されるもの

⑤ 自然な並列にする→生成、成長

[モデル訳]

私の歴史の見方そのものが一個の歴史学であるとはいえよう。だが学問としての歴史総体は多くの人たちが築いてきたもので、私ひとりのものではない。そもそも学究の生涯を貫く仕

事は、他の数知れぬ人たちに倣って、知識溢れ浸す大河にバケツ一杯の水を注ぐことなのだ。私の歴史観が人の足元を照らすだけのもの、いや少なくとも理解してもらえるだけのものになるには、それを培った社会的・個人的環境を交え、形成の軌跡を示さねばなるまい。

VI 結語

外国、とくにアジア諸国に出かけて英語が話せないと、本当に大学を出たのかと訝られるという話をよく聞く。だから日本の英語教育はだめなのだと、続くわけだが、これは短絡というもの。自国語で高等教育を受けられない国では、英語で授業を受けざるを得ず、必然的に英語がうまくなるという仕組みだ。自国の言葉で高等教育を受けることのできる日本人は幸せもの。明治初期にいち早く西洋式の教育を受けた夏目漱石は、植民地でもない日本の高等教育が外国語でなされることに疑問を感じていた。「日本の Nationality は誰が見ても大切である。英語の知識位と交換の出来る筈のものではない」と。だが明治40年になると、大学の授業は大方日本語で講ぜられるようになっていた。そんなに短期間に、自国語での高等教育が可能になったのは、ただただ日本語の咀嚼力の強さによる。

往古漢文訓読で思考力を養ったように、近代日本では、英文精読が語学力、論理力、表現力を養う源となった。日本の教養人の養成システムに英語学習がしっかり組み込まれていたのである。英語学習は近年になってますます盛んとなり、会話力や概要をつかむ力が伸びていることは確かだし、望ましいことではある。

だが心配なのは、教養主義の没落とともに文章を読む力が明らかに落ちてきていることだ。抽象概念が詰まった外国文を精確に読めてこそ、つまり翻訳できる力がついてこそ、外国語での情報を間違いなく把握でき、外国語での高度の会話もできる。紋切り型の日常会話など下手にやると誤解を増すばかりだ。

翻訳手法を用いての英語教育。興味持たれる教員諸氏がおられたら、相携えて、さらに有効な手法をともに考えてゆきたいと思う*8。

*8 本稿のII、IIIは、翻訳家、山岡洋一の個人メールマガジン『翻訳通信』への掲載稿を加筆・訂正したもの。I、IV、V、VIは、今回書き下ろした。